

駿建 2020 Jan. vol.47 No.4

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

*Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*



SPECIAL FEATURE

学外へ
世界へ
研究力の発信



SPECIAL FEATURE

学外へ世界へ 研究の発信

これまで体験してきた小・中・高校と大学との違いは、さまざまな部分に見られますが、そのひとつに学外や世界へ、自分たちの研究の成果を発信する機会を持てることが挙げられます。学内あるいは研究室内で切磋琢磨しながら、研究を通して発見したことを、外の世界へ接続させることで、研究そのものがより膨らみを持つこともあれば、学外のさまざまな人々とのつながりを持つこともあるでしょう。そして、それらもまた建築の分野ごとに特徴があるものです。今回の特集では、日大理工建築の各分野において、学外へ、世界への研究の発信がどのように行われているかを探るものです。自分の興味のある分野では、どのような発信と、その先にどのような気づきがあるのでしょうか。

主な学外研究発信の年間スケジュール

- 4月 [構造] 構造工学シンポジウム (毎年)
[環境] 日本騒音制御工学会秋季研究発表会 (毎年)
[計画] 建築史学会大会 (毎年)
- 5月 [構造] セメント技術大会 (毎年)
[計画] 日本設計工学会春季大会研究発表講演会 (毎年)
- 6月 [計画] 家具道具室内史学会大会 (毎年)
[計画] 日本デザイン学会春季研究発表大会 (毎年)
- 7月 [構造] コンクリート工学講演会 (毎年)
[構造] 地盤工学研究発表会 (毎年)
[計画] 日本建築学会地域施設計画研究シンポジウム (毎年)
- 9月 [共通] 日本建築学会大会学術講演会 (毎年)
[環境] 日本音響学会秋季研究発表会 (毎年)
[構造] 日本地震工学会・大会 (毎年)
[環境] 空気調和・衛生工学会 (毎年)
[計画] 日本設計工学会春秋季大会研究発表講演会 (毎年)
- 11月 [構造] 日本材料学会地盤改良シンポジウム (隔年)
[計画] 日本都市計画学会 (毎年)
[計画] 日本不動産学会秋季全国大会 (毎年)
[環境] 日本騒音制御工学会秋季研究発表会 (毎年)
[環境] 空気調和・衛生工学会 (毎年)
[計画] Design シンポジウム (不定期)
- 12月 [共通] 日本大学理工学部学術講演会 (毎年)
[構造] 日本地震工学シンポジウム (4年毎)
[計画] 日本建築学会住宅系研究報告会 (毎年)
- 2月 [構造] 全国圧送技術大会
- 3月 [共通] 日本建築学会関東支部研究発表会 (毎年)
[共通] トウキョウ建築コレクション (毎年)
[環境] 日本音響学会春季研究発表会 (毎年)
[計画] 都市住宅学会学生論文コンテスト (卒業論文部門、
修士論文部門、博士論文部門) (毎年)

- 主要な論文集

- [共通] 日本建築学会論文集
- [共通] 日本建築学会技術報告集
- [構造] 膜構造研究論文集
- [構造] コンクリート工学論文集
- [構造] 鋼構造論文集
- [構造] 日本地震工学会論文集
- [構造] セメント・コンクリート論文集
- [構造] 地盤工学ジャーナル
- [計画] 都市計画論文集
- [環境] 空気調和・衛生工学会論文集
- [計画] デザイン学研究
- [計画] Journal of the Science of Design
- [計画] 設計工学

- 主要な国際会議

- [環境] International Congress on Acoustics (3年毎)
- [環境] INTER-NOISE (毎年)
- [環境] International Congress on sound and vibration (毎年)
- [構造] IASS International Symposium (毎年)
- [構造] Structural Engineers World Congress (隔年)
- [構造] World Conference on Earthquake Engineering (4年毎)
- [構造] World Conference on Structural Control and Monitoring (4年毎)
- [構造] World Conference on Seismic Isolation, Energy Dissipation and Active Vibration Control of Structures (隔年)
- [構造] International Society of Offshore and Polar Engineers (毎年)
- [計画] International Docomomo Conference (隔年)





SPECIAL FEATURE
学外へ世界へ
研究の発信

スペシャル座談会

研究の魅力とは？ 学外発表の醍醐味とは？

インタビュアー：田嶋和樹 准教授
 インタビュイー：市川大真（大成建設）
 鷲海昂（日本設計）
 服部恵多（清水建設）
 山崎由美子（大成建設）

— 昨年の「駿建」2019年1月号では、「大学院の楽しさを語ろう」という特集が組まれました。今回参加してくれている服部さんと山崎さんは原稿を書かれたので、記憶に残っているのではないかと思います。とても良い特集だったので、今からでも多くの学生に目を通してほしいと思います。

そして、1年を経た今年、「駿建」2020年1月号のテーマは「学外へ世界へ 研究の発信」です。1年前の特集とのつながりを意識しつつ、意匠設計とは違って、学部生の目に触れにくい「研究成果を論文にまとめて発表すること」に焦点を当てていきたいと考え、この座談会を企画しました。そこで、真っ先に浮かんだのがみなさんでした。お集まりいただいた4人は、いずれも昨年度、大学院博士前期課程を修了した同級生です。そして、構造系の研究室に所属し、自身の研究成果を学外で発表して高い評価を得たという共通点があります。せっかくの機会ですから、在学生の「道しるべ」になるような座談会にしたいと思いますので、いろいろなことを聞かせてください。

構造の世界に入るきっかけ

— それでは、最初の質問です。昔から建築学科に入学してくる学生は、意匠設計者、いわゆる建築家を目指していることが多いのですが、いつ、どのようなきっかけで建築構造の道に進もうと考えたのかを教えてください。

市川：私は日大三島高校出身なので、日大への進学を目指していました。高校時代は野球ばかりやっていたので、成績はあまりよくありませんでした。ただ、数学と物理だけは好きで、計算が得意だったので、進路を決める頃には理工学部へ進学できたらいいなと考えていたところ、内申点が建築学科に届きそうということで、そこから建築学科への進学を考えはじめました。

入学してみると、1年次は専門の授業は少



なかったのですが、「デザイン基礎」とか「建築設計Ⅰ」といった設計の授業には大きな時間を割いていたように思います。ただ、建築設計の授業を頑張ろうとしたものの、なかなか上手くいかず、毎回のエスキスでも先生にダメ出しされることが多く、あまり良い評価が得られませんでした。一方、1年次後期に設置されていた構造系科目である「初等構造力学」が楽しくて、できる喜びを知った気がします。実際、私たちが一緒に勉強していたグループは、他のグループよりも問題が解けたりしていたので、だんだん頑張ろうという気持ちになっていきました。そして、2年生のときには建築構造の道に進もうと決めていました。

鷲海：私は小・中・高までエスカレーター式に進学したのですが、大学で理系に進もうと意識したときには、高校の先生になりたいと考えたりもしていました。ただ、父親が建築関係の仕事をしていたこともあり、家族旅行に行くときには建築が目当てになっていたりして、次第に建築学科に進学して、建築の道に進もうと考えるようになりました。大学は、日大が第一志望というわけではありませんでした。当時は、特に建築構造の道に進もうとは考えておらず、憧れの先生が在籍していた某大学に進学したいと考えていましたが、最終的には、父親の母校でもある日大理工建築に進学する

ことになりました。

私の場合、3年次後期の研究室配属の直前まで、設計系に進むか構造系に進むかを迷っていました。どちらかという、構造系よりも設計系に進もうとする気持ちが強かったと思います。そのため、設計系の研究室の面接では、構造を考えた設計をしたいと伝えていました。結局は構造系の研究室に所属することになりましたが、入学してから知った斎藤公男先生の影響が大きかったと思います。それから、市川くんも言っていました、「初等構造力学」の影響もあったかもしれません。そして、一緒に構造関連の授業を受けていた仲間たちが、構造系に進むことを決めていたことも影響しています。

服部：私は公立高校の出身で、特に進学校というわけではなく、大学に進学する学生は半数ぐらいでした。当時、私は何をやりたいのかわからなくて、将来の進路に悩んでいました。そんな中で、建築学の幅の広さは魅力的でした。まずは大学の建築学科に進学して、勉強しながら自分の進路をじっくり決めようと考えました。それから、建築家の安藤忠雄氏のことは知っていたので、建築に対して良いイメージがあったことも、建築学科に進学した理由のひとつです。ちなみに、日大理工建築は第一志望でした。

山崎由美子（やまざき・ゆみこ）

- ・高校：さいたま市立浦和高校
- ・大学：日本大学理工学部建築学科
- ・大学院：日本大学大学院理工学研究科建築学専攻
- ・研究室：鋼構造・耐震設計研究室
- ・就職先：大成建設



進学後に勉強しながら自分の進路を決めようと考えていただけに、構造系に進むきっかけとなったのは大学の授業です。私も先ほどから出ている「初等構造力学」に影響を受けました。それから、「鉄筋コンクリート構造Ⅰ演習」です。構造力学の授業で学んだ単純梁や両端固定梁のM図が、実際にどう使われるのか曖昧な理解しかできていない状態だったのですが、この授業を通して、構造力学が具体的にどのように建物の構造設計に結び付くのかを理解できたのは、とても大きかったです。それから、「対地震構造」の授業です。自分の力不足で本当にわからなかったのですが、逆にこの内容が理解できれば、きっとすごいことになると思い、強く興味を持つようになりました。

山崎：私も公立高校の出身ですが、実はずっと獣医になりたいと考えていました。一方、父がもともと構造設計者だったので、高校生のときに、さまざまな建築のプロジェクトがメディアで取り上げられて話題になっている様子を見て、父の仕事はすごい仕事なんだと意識したのを覚えています。私の高校では、2年生のときに、理科の科目として物理か生物かを選択しなければならず、このときに同時に自分の将来の進路を考えることになりました。結局、獣医になるには6年制大学に進学しなければ

ならないので、4年で卒業できる建築学科へ進学する気持ちを固めました。

私の場合、父がもともと構造出身ということもあり、構造系に進むことを入学した時点から決めていました。父親に憧れた手前、私も構造系に進むことを決めたという感じです。

大学院へ進んだ理由

— 四者四様のバックグラウンドがあって面白いですね。それぞれ異なる構造系の研究室に所属することになったわけですが、大学院に進学して、研究の道に足を踏み入れようと思ったのはなぜですか。特に山崎さんは、4年で卒業できることを意識して建築学科を選択したみたいですが。

山崎：学部3年生のときに、建築施工と構造設計のどちらに進むか悩んでいたんです。夏休みには某ゼネコンのインターンに参加して、建築施工の仕事を体験しました。インターン

で経験した建築施工の仕事はとても魅力的だったのですが、それ以上にゼネコンで構造設計をしたいと思うようになりました。建物は実際に建ってこそ意味があるので、実際につくる側のことを考えることが重要だと思うのです。そして、それを一番実践できるのは、設計と施工を一体で行うゼネコンの構造設計者だと考えるに至りました。そして、目指すならスーパーゼネコンの構造設計部だと考えたとき、大学院で専門性を高めることが重要だと思い、進学を決めました。結局、獣医を目指す場合と同じ6年間も大学に通うことになりましたね。

服部：実は、私も4年生のはじめ頃まで就職活動をしていました。大学院に進学すると、少なくともあと2年分の学費を親に負担してもらうことになるので、なんだか親に申しわけないという気持ちでした。でも、研究室に所属して卒業研究をはじめてみると、もっと勉強したいという気持ちが強くなりました。このまま就職するのか、勉強するために大学院に残るのか、本当に悩みましたね。確か6月に研究室内で大学院進学の希望を取りまとめていたのですが、その頃に、指導教員であった秦先生に相談を重ねたり、当時の大学院生に話を聞いた中で、進学への気持ちが強くなり、最終的に進学を決めました。



服部恵多（はっとり・けいた）

- ・高校：神奈川県立茅ヶ崎高校
- ・大学：日本大学理工学部建築学科
- ・大学院：日本大学大学院理工学研究科建築学専攻
- ・研究室：免・制震構造研究室
- ・就職先：清水建設



SPECIAL FEATURE
学外へ世界へ
研究の発信



鴛海昂（おしうみ・あきら）

- ・高校：成蹊高等学校
- ・大学：日本大学理工学部建築学科
- ・大学院：日本大学大学院理工学研究科建築学専攻
- ・研究室：空間構造デザイン研究室
- ・就職先：日建設計

鴛海：私は2人とは違って、大学に入学した時点ですでに大学院進学を決めていました。これは父親の影響が大きいです。建築の分野で専門的な仕事をするならば、大学院進学が前提であると聞いていました。先ほど日大理工建築に入学した経緯の話をしました。選択肢のひとつとして、他大の大学院に進学することも考えていました。

市川：私は周りの仲間に影響されたというのが正直なところ。当時、仲間たちが先に大学院に進学することを決めていました。そして、彼らが学部卒で就職することを選択しなかったことで、当時の自分の知識量や能力に不安を感じるようになりました。自分の強みは何かを自問自答したときに、それがなかなか思い当たらないことに気が付きました。そのとき、大学院でそれを見つけない、それを身に付けたいと考えました。

— 私も4年生のときに同じことを考えました。卒業研究をはじめてすぐに研究にはまったということもあるけれど、自分にとって新しい世界が目の前に広がったことで、次第に自分の能力に不安を感じるようになり、大学院に進学したいと考えるようになりました。

どうして研究にはまったのか？

— さて、今回の座談会の核心に進んでいこうと思います。私もそうでしたが、研究をはじめてみると、いつのまにか夢中になっている自分に気が付いたと思います。私はそれを「研究にはまる」と言っているのですが、みなさんが研究にはまったきっかけは何ですか。

市川：私はRC造建物の損傷評価の研究をしていたのですが、研究テーマを選んだきっかけは、研究室のゼミで著名な研究者の論文をレビューする課題を行ったことでした。そして、研究にはまったきっかけは、学部4年生のときに熊本地震の被害調査に連れて行ってもらったことです。実際に被災した建物を見ることができたのは、本当に貴重な経験でした。建物が現実には壊れるということを想像できるようになったことで、自分の研究に対するモチベーションがとても高まりました。

ただ、実際に研究に取り組むようになると、指導を受ける先生方が圧倒的な知識量を持っているので、自分も相当準備しないと跳ね返されてしまいます。その覚悟はしていましたが、自分の想像以上でした。そのため、とにかくきちんと調べることの重要性を強く感じました。そして、短期的ではなく、長期的に得られた研究成果を先生方に認めてもらえたときは、もっと頑張りたいと思いました。もちろん、跳ね返されたときは見返してやろうという反骨心が出るし、改善すれば褒められる機会が増えると考えようにしていました。

鴛海：私は放射型ケーブル屋根構造の研究をしていました。自己釣合い系の特徴を有する構造なのですが、実験をしていた4年生のとき、ケーブルに張力を導入するために錘をどのように設置するか計画して、自分が意図した形状が目前で実現したときは嬉しかったです。それから、屋根構造なので、風荷重についても検討していたのですが、目に見えない風によって生じる現象を風洞実験と数値解析によって可視化できたときは驚きました。このような、嬉しかったり、驚いたりした経験が研究

の面白さにつながっていきました。ただ、市川くんも言っていたように、自分の研究内容を相手に的確に伝えることはとても重要なことだと思います。先生方から指導を受けるにしても、自分の現状をきちんと伝えて、研究を進めるための効果的なアドバイスをいただくための準備が必要であり、そのためにどうすれば良いかを考えることも面白かったです。

山崎：先ほど鴛海くんが、4年生のときの実験の話をしていましたが、私も同じときに実験をしていて、事前に予想していたものと違う結果が出たことがありました。それから面白くて、予想と違う結果となった原因を調べて、それを改善することで、再実験したときに正しいと思える結果が得られました。このようなプロセスを経験したことで、研究が面白いと思えるようになりました。

服部：私は市川くんと考え方が近いかもしれませんが、秦先生に褒められることが嬉しくて、研究にはまっていきました。それから、私は「日本建築学会構造系論文集」を連名者として執筆したのですが、学術論文に自分の名前と文章が掲載されたことで、研究のモチベーションが高まりました。

構造系の研究だからこそ感じること

— その気持ちは良くわかります。自分が生きた証拠が形として残るからね。ちなみに、「構造系論文集」に取り組む中で何か感じたことはありますか？

服部：改めて自分の研究内容を伝えることは

難しいと感じました。秦先生と私が打合せを重ねる中で、共通の専門用語のようなものができ上がっていたのです。それをそのまま論文に書いてしまったところ、査読者には意味が通じなかったようで、再査読の指摘がA4用紙で4枚ぐらいの分量になりました。内容もかなりきつくて……、とてもショックでした。でも、それから自分の中で当たり前になっていた専門用語の意味を改めて見直しました。

—それはとても良い経験だと思います。学外発表の醍醐味だね。その他、みんなが経験して感じた学外発表の醍醐味って何かありますか。

市川：学外の先生の意見を聞くことができることです。研究室の中では考え付かないような違った考え方に出会えることがあるので、研究の可能性が広がります。これは、学外発表してみないと気が付かなかったことです。

山崎：質疑応答の際にいただけるコメントは、本当にありがたいです。

服部：市川さんの言うとおり、違う視点に出会えることはありがたいことです。ただ、質疑応答の際、普段考えていないような視点から質問をいただくと、その場で理解できないことがあり、自分の未熟さを感じました。後で時間をかけて考えればわかるのですが、その場の質問のやり取りが成立しないということを経験できたことは、自分にとってとても勉強になりました。

鷺海：やはり、自分の研究を正しく、わかりやすく伝えないと質問すらしてもらえないです。そのため、学外発表では、研究の背景や目的をきちんと伝え、それと結論のつながりを示すことが大事だと気が付きました。私は海外での研究発表も経験しているのですが、海外と日本の研究者では、研究に対する着眼点が違うことが多くて興味深かったです。特に、海外

の研究者は、研究内容の細部よりも研究の大方針に興味を持つ人が多いと感じました。このような海外と日本の考え方の違いを知れたことは、良い経験になりました。

市川：学外発表を通じて勉強できる部分は多いのですが、一方、他大学の学生の発表を見ることで、自分たちでも十分勝負できると感じることができます。他者との比較ができる場でもあるので、自分が取り組んでいる研究のすばさや自分自身が成長していることを実感でき、自信につながることもあります。みんなも同じだと思いますが、実際に学外発表で受賞してみると、その想いは強くなります。

—後世に残したい座談会になりましたね。せつかくなので、最後に後輩へのメッセージをお願いします。

服部：やはり、大学院に進学して研究することを経験してほしいです。特に、進学を悩んだ自分としては、大学院のメリットやデメリットを考えるとばかりでは良くないと思います。大学院進学を決め手となるものは知的好奇心であり、学問を探究する気持ちが大切だと思います。研究を継続するモチベーションも、興味に対する欲求です。その先の就職のことばかり考えるのではなく、自分が興味を持てることを探してほしいです。

市川：私も大学院進学を考えてほしいと思いますが、それ相応の覚悟をしてほしいです。特に、自分に必要なことを積極的に身に着けようとする態度が必要だと思います。例えば、建築学科にはプログラミングの授業があまりあ

りませんが、数値解析をしたり、データ整理を効率化したりするには、プログラミングの能力が必須だと思います。後は英語でしょうか。研究を進めるにあたって、海外の文献を読んで研究の状況を把握することはとても大切です。そして、それに要する時間を短縮して、時間を有効活用できるようにしておく必要があります。

鷺海：大学院時代に何かに没頭できる時間を確保できたことは良かったし、とても大事なことだと思います。そして、修士課程は2年間だから、その限られた時間を有効に使うことも重要です。市川くんが言うように、自分から学ぶとする姿勢はとても大切です。今になって思うことは、研究で数値解析を利用していたので、もっと数値解析の中身の話を理解できれば良かったと思います。

山崎：私は女性を代表してメッセージを送ります。今、ゼネコンには女性が増えていますし、社会全体として女性の社会進出が求められています。会社も女性が働きやすい体制を整えてくれており、育休もしっかり取れるようになっています。だから、寿退社は減っていて、女性も定年まで考えたキャリア形成が必要になります。このことは、女性にとって非常に好ましい状況ではありますが、逆に、今まで女性だからと許されたことも許されなくなります。だからこそ、自分がやりたいと思ったことがあるなら、自分を貫いて頑張りましょう。間違いなく、今はそういう世の中です。 ■



市川大真 (いちかわ・もとちか)

- ・高校：日本大学三島高校
- ・大学：日本大学理工学部建築学科
- ・大学院：日本大学大学院理工学研究科建築学専攻
- ・研究室：RC構造・構造解析研究室
- ・就職先：大成建設



環境系の研究の発信とは？

国際会議への投稿、他大や企業との共同研究も

TEXT = 岡庭拓也 (M2・建築音響研究室)

2014年 千葉日本大学第一高等学校 卒業

2018年 日本大学工学部建築学科 卒業

2020年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 修了予定

私は、修士論文のために鉄道高架下保育施設の音・振動環境に関する研究を行っています。この研究は、子どもの音・振動環境保全の観点から、鉄道高架下保育施設の鉄道騒音・振動に対する対策法の提案や、設計資料となるデータの収集を目的としています。現在、修士論文の範囲では、それらの検討に必要と考えられる、電車の音・振動に関する子どもの反応に注目した評価方法の提案を目標に研究を進めています。

私たちの調査によると、東京都市圏内(東京、神奈川、千葉、埼玉)では、2018年4月から2019年9月までに、新たな鉄道高架下保育施設が5園建設され、全体では60園を超えています。これらの保育施設の内、21園の保育施設で研究に協力していただき、アンケート調査などに協力していただいた保育士の先生方は200人を超え、観察調査に協力していただいた子どもたちは240人を超えています。こうした協力もあり、**7件の研究成果を複数の学会や研究会で報告することができました。**

このような保育施設に関する研究活動を進

める一方で、指導教員である富田先生の研究のうち、同じく保育施設を対象とした、畳付き収納家具を利用した小規模保育施設における床衝撃音対策に関する一連の研究において、共同研究者として実験や解析に参加しています。この研究では、学外の実験施設を利用した床衝撃音測定や、防振理論を用いた新たな実験材料の開発など、私の修士論文の範囲では経験することのない、さまざまな実験方法、検討方法を学ぶことができ、自分自身の研究テーマを考える上でも大変良い刺激になっています。

また、小規模保育施設における床衝撃音対策に関する研究も、**連名で5件の研究成果を報告しており、さらに、一連の研究成果を国際会議にも連名で投稿しました。**特に、この国際会議への投稿をきっかけに、ISOやWHOなどの国際基準や海外論文などを意識するようになり、現在の私の研究に対するスタンスは、大きな影響を受けたと感じています。

また、富田先生が所属する委員会の活動の中で、**屋上園庭を持つ保育施設の音環境の測**



床衝撃音および高架下電車騒音の測定。

定に、複数の大学や企業の先生方とともに参加させていただいたこともあります。富田研究室は、富田先生指導のもと、私を中心に現場の測定や解析に携わりました。普段の学内での活動ではあまり関わることのない方々と交流することができ、良い刺激になったとともに、一部の先生方とは顔見知りになることもできました。

私は、元々研究職志望で大学院進学を決めました。このようなさまざまな研究活動を続けるうちに、企業の研究者から研究職にお誘いをいただく形で、当初の志望通り、将来は研究職に進むことになりました。この経験や先生方とのつながりを活かせるように、さらに尽力していきたいと思っています。 ■



畳付き収納家具の床衝撃音測定。

4 機関合同の騒音・振動に関する研究プロジェクト

TEXT = 後藤佑太 (M2・建築音響研究室)

2012年 岡山県立岡山操山高等学校 卒業
 2018年 日本大学理工学部建築学科 卒業
 2020年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 修了予定

受賞歴
 第62回日本大学理工学部学術講演会優秀発表賞
 日本音響学会令和元年度騒音・振動研究会学生優秀発表賞
 日本騒音制御工学会令和元年度秋季研究発表会学生優秀発表賞

私 たちの研究室では、建築空間の快適性に着目した研究を行っています。近年、居住者や建物の利用者の要求性能の高まりから、音環境や環境振動に関する問題が増加傾向にあり、非常に重要なテーマであると考えています。修士論文では、建築物における環境振動に着目した研究に取り組んでいます。

環境振動とは、日常生活の中で、電車・道路交通・建設作業などによって発生する振動のことで、居住者や建物の利用者に精神的苦痛や身体的苦痛を与える恐れがあります。これらの環境振動に対して、予測や対策を講じるためには、居住者や利用者の環境振動に対する評価が重要になってきます。

私は、長期生活における居住者の生活実感を反映した、環境振動評価規準の作成を目標に研究を進めています。先生方や学部生にアドバイスやサポートをしていただき、非常に充実した環境で、主体的かつ計画的に研究を行うことができている。

また、私自身の修士論文のテーマ以外にも、



研究室での解析および実住宅での測定。



北陸新幹線による振動伝搬測定。

富田先生主導のプロジェクトに参加させていただき、カーペット床や畳床上において、設置共振が生じて正確な振動測定が困難な問題に対して、防振ゴムを利用した新たな環境振動測定方法に関する研究を行っています。実務的な問題に触れることで、物事を客観的に評価し、柔軟かつ多角的に物事を考え、捉えることが、非常に重要だと感じました。

大学院生活の約1年半の間に、**私自身の修士論文のテーマでは学内で2件、学外で6件、富田先生主導のプロジェクトでは学外で7件、計15件の研究発表**を行いました。精力的に修士論文の研究に励んだ結果、**学内の昨年12月の日本大学理工学部学術講演会、学外の今年7月の騒音・振動研究会、11月の日本騒音制御工学会**において、学生優秀発表賞を受賞することができました。

建築学会や音響学会などの学外における研究発表を行う最大のメリットは、研究に関する自身の考えに対して、あらゆる視点から多くの意見をいただけることだと思います。また、異

なる研究分野に触れ、多くの人と関わることで、互いの知識を共有し、新たな知見を広げる良い機会だと考えています。さらに、参加させていただいた研究室のプロジェクトにおいては、研究成果が「日本建築学会環境系論文集」に掲載され、私自身にとってもさまざまな知識や経験を得ることができ、とても貴重な体験となりました。

学外の活動では、北陸新幹線における騒音と振動の複合効果が、居住環境に及ぼす影響を研究する**4機関合同プロジェクト**に参加させていただき、北陸新幹線沿いの住宅の騒音や環境振動の測定と分析を行いました。実際の騒音や環境振動の問題に直面している現場に行き、居住者の方の声を聞いたことで、改めて自身の研究の重要性を確認し、やりがいのあるテーマだと感じました。このように、大学院で培った多くの有意義な経験が、大きな自信につながり、社会に出た後も大いに役立つと考えています。

■



構造系の研究の発信とは？

自分の人生を決定づけた学外発表での経験

TEXT = 田嶋和樹 准教授

1995年 土浦日本大学高等学校 卒業
 1999年 日本大学理工学部建築学科 卒業
 2004年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期
 課程 修了
 2004年～日本大学理工学部建築学科

受賞歴
 第25回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞

4年生になり、白井研究室の門を叩いた私は、コンクリートの破壊現象の奥深さや、鉄筋コンクリート研究の難しさに魅力を感じはじめ、朝から晩まで研究室に入り浸る生活を過ごすようになりました。「理解できないことが楽しい」という不思議な感覚の中、時間を忘れる毎日を過ごしていたように思います。私は中学校の数学教員を目指していたのですが、紆余曲折を経て、大学院進学を決意するのに時間は必要ありませんでした。

そして、無謀にも世界で誰もやっていない研究をやろうと考え、当時最先端の研究テーマであったコンクリートのメゾレベルひび割れ解析技術に、セメントの水和反応の影響を組み込み、強度発現に伴うコンクリートのひび割れ進展性状の変化を、理論的に解明しようとする挑戦がスタートしました。いざ研究をはじめてみると、思っていた以上に成果が出ない状況でしたが、そのことに焦ったり、悩んだりということはありません。どんどん研究にはまっていきました。M1の冬には、両親を説得し、博士課程進学を決意していたほどです。一方、相変わらず成果が出ない状況は続いていましたが、修士論文発表会の数日前に、目標としていた成

果が得られたときの爽快感は忘れられません。

さて、私にとって一番思い出深い学外発表は、この修士論文の成果を引っ提げて、D1のときに参加した**FraMCoSというコンクリートの破壊力学に関する国際会議**での発表です。博士課程進学が決まった頃、研究成果が出ていないにも関わらず、白井伸明先生から、この国際会議への論文投稿を勧められた記憶があります。今思えば、それに値する研究であると認めてくださったのだと理解できますが、当時の私にはプレッシャーでした。特に英語が……。

時は流れ、D1の2001年5月31日**パリ郊外のカシャンにある会場で発表**の時を迎えます。会場には、国内外の有名教授たちが集まっていたらしいのですが、当時の私は、先生方の顔と名前が一致しておらず、余計な緊張をせずに済みました。それでもギリギリの緊張感の中で発表を終え、質疑応答をなんとか乗り越えたときは、もう気を失いそうな感覚でした。ただ、発表後に思いがけず貴重な経験がありました。これが学外発表の醍醐味だと思うのですが、ひとつはセッション終了直後に、当該分野の最先端を走っておられたUC DavisのBolandar先



研究に夢になったまま寝落ちしたことも。

生から、「Excellent!」とお声掛けいただいたことです。憧れを抱いていた先生からのお褒めの言葉に、まさに天にも昇る心地でした。また、会場の外で記念撮影をしていた私のところへ、トルコ人の研究者が駆け寄り寄ってきて、私の発表を賞賛してくれたのです。このような海外の研究者からの反応は、その後の自分にとって、大きな自信につながりました。もうひとつは、同じ分野の日本の先輩研究者たちと知り合えたことです。帰国後、さまざまな機会を目をかけていただき、いろいろなチャンスをいただく中で得た経験が、今の私を形づくっているとんでも過言ではありません。 **談**



駆け寄り寄ってきたトルコ人研究者と一緒に。



セーナ川のほとりで、京都大の金子先生と岐阜大の国枝先生と一緒に。

私の研究人生の原点 — 国際解析コンペ FRAMA を振り返って —

TEXT = 河野圭一郎 (D1・RC構造・構造解析研究室)

2012年 山梨県私立駿台甲府高等学校 卒業
 2016年 日本大学理工学部建築学科 卒業
 2018年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 修了
 2018年～株式会社NJS
 2019年～日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程

受賞歴
 第39回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞
 第40回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞

私は、今年度から社会人ドクターとして、再び大学に戻りました。現在、平日は会社で働き、休日は大学で研究をする生活を送っています。仕事と研究の両立は大変ですが、それ以上に、自分の好きなことをできている喜びを感じており、充実した日々を過ごしています。私がここまで研究にのめり込むようになったのは、学部4年生で取り組んだ、FRAMAへの挑戦がきっかけでした。

FRAMAとは、クロアチアのUniversity of Osijekが主催した国際的な数値解析コンペであり、対象となる試験体の地震時挙動を数値解析によって事前に予測し、その後を実施される実験の結果と比較し、数値解析の精度を競います。この数値解析コンペに、私を含めた同期3人で取り組みました。試験体は「レンガ壁付きRC造骨組」であり、日本ではあまり馴染みがありません。私は、FEM解析モデルの作成を担当したのですが、国内にレンガ造に関する研究事例が少なく、どのようにモデル化すれば良いか悩みました。何度も試行錯

誤し、時には仲間や先生方と議論しながら、最終的に自分なりの答えを導きました。この経験を通じて、最終的な結論に至るまでの「考え方」や「プロセス」が重要だということを学びました。例えば、モデル化の場合、レンガ壁を有する特殊な架構に対して、なぜそのような方法を選んだのか、自分なりの考えや根拠を持たせる必要があります。なぜならば、それがモデル化の手法と、そこから得られる解析結果の信憑性を高めることにつながるからです。

「なぜ」、「どうして」という考え方は、研究に取り組む上でとても大切です。「予め答えが決まっている問題」の解き方を学ぶことが多い大学での授業と異なり、研究では「答えがわからない問題」に対してどのようにアプローチするか、自分で考える力が必要になるからです。はじめはなかなか難しいのですが、私の場合、FRAMAへの挑戦を通じて鍛えられたと感じています。また、そのアプローチや考え方も一通りではなく、人それぞれの色が出ます。言

い換えると、そこでいかに自分の色、オリジナリティを出し、その研究を突き詰めていけるかが大事であり、それが研究の面白い部分だと思えます。

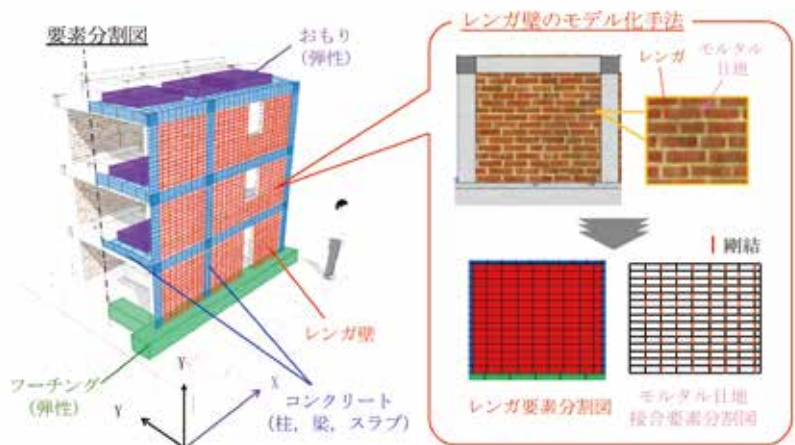
私は研究室で過ごした3年間を通じて、研究の面白さに触れました。卒業後、1年間は普通に社会人として働きましたが、研究の楽しさが忘れられず、自分の研究をさらにもっと突き詰めたいという気持ちが強く残っていたため、悩むくらいなら挑戦してみようと思って、大学に戻ることを決意しました。皆さんの中にも、大学院進学を迷っている人がいるかと思いますが、もし悩んでいるのであれば、思い切って一歩を踏み出してください。そして、研究の面白さに触れてください。そこでの経験は、皆さんを研究者としてだけでなく、人としても成長させてくれることでしょう。私自身、これからの大学院生活を経て、自分がどう変わっていきけるのか、とても楽しみです。 ■



数値解析コンペに取り組んだ同期3人。



レンガ壁付きRC造骨組みの試験体。



何度も試行錯誤を行い、作り上げたFEM解析モデル。



構造系の研究の発信とは？

大学院生活の経験を社会で活かして

TEXT = 熊田健太（西松建設）

2011年 さいたま市立大宮北高等学校 卒業
 2015年 日本大学生産工学部建築工学科 卒業
 2017年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 修了
 2017年 西松建設株式会社

私は、ゼネコンの技術研究所で、地盤基礎分野の研究開発の仕事をしています。大学院では、地盤基礎の研究室に所属し、宅地地盤の液化化予測に関する研究に着手していました。研究活動は、学内の複数の研究室と共同で進め、私は数名の先生方からご指導をいただき、大変有意義な経験をしました。後輩たちと一緒に、実験で砂が入ったバケツを持ち上げて、汗を流しながら土槽に模型地盤を作製したのは良い思い出です。

大学院生の学外における研究活動のひとつには、**学会主催の研究発表大会への参加**があります。研究活動には根気強さが必要ですが、私が入会している日本建築学会の基礎構造部門や地盤工学会では、若手の優れた大会発表に対し、顕彰を行う制度があり、表彰されることを目指して頑張りました。幸いなことに、**日本建築学会、地盤工学会**それぞれから賞をいただくことができ、良い思い出となっています。

大学院の最後には、**国際学会である The 27th International Ocean and Polar Engineering Conference (ISOPE-2017)** へ論文投稿を行い、入社後にサンフランシスコの会場で口頭発表に挑戦しました。はじめての英語での口頭発表に、とても緊張しましたが、終わったときには達成感があり、挑戦して良かったと思っています。国際学会の参加を通して、世界各国のユニークな研究テーマはもとより、日本国内と同様な問題意識で取り組んでいる発表もあり、（当然ですが）学問は世界共通であることを再認識して、自分の視野が広がり、その後の研究の良い刺激になりました。

大学院では、日々の実験などを通して建築を学ぶことが多いかと思いますが、私はそれ以上に、そこで得られた知見を先生方と相談しながら、梗概や口頭発表という形にまとめた経験が、社会人になってから非常に役に立っていると感じます。大学院で取り組んだ研究内

受賞歴

第85回日本建築学会関東支部研究発表会若手優秀研究報告賞
 2016年度日本建築学会大会基礎構造部門優秀発表賞
 2016年度日本建築学会大会基礎構造部門優秀発表賞
 第51回地盤工学研究発表会優秀論文発表者賞
 第66回青年技術者顕彰施工部門（一社）日本建築協会



ISOPE-2017での口頭発表。



ISOPE-2017会場にて。

容が、そのまま実務に活かせる機会は多くありません。しかしながら、大学院時代の研究活動の中で、先生方や後輩達と行った論文作成や口頭発表の経験は、社会に出てから必ず役に立ちます。私は短い期間でしたが、入社して、設計や現場の施工管理を経験しました。設計にしても、現場へ出て活躍するにしても、問題にぶつかることの連続で、仕事とは、問題解決のための道筋を合理的に組み立てて発表（報告）することの連続だと思います。その意味においては、仕事と大学院での研究活動は似ていて、問題解決に向けたアプローチを、日々の研究活動や学会発表を通して学ぶことができます。大学院での時間の使い方は自由で、2年間で研究に限らず、いろいろな経験ができます。学生時代に「自分のやりたいこと」が明確に見つからなければ、難しく考え込むことはせずに、今いる自分の環境を信じて、2年間、とにかく目の前のことに手を動かすことが大切です。失敗しても挽回できます。学生時代を楽しみましょう。



サンフランシスコにて。

見失った“目標”が、研究活動でみつかった

TEXT = 稲澤琴恵 (M1・材料施工研究室)

2015年 日本大学第一高等学校 卒業

2019年 日本大学理工学部建築学科 卒業

2021年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 修了予定

受賞歴

第89回日本建築学会関東支部研究発表会優秀研究報告集

私は大学院に進学し、現在、建築材料・施工の数ある分野の中で、コンクリート表面に関する研究を行っています。大学に入学した当初は、デザインや設計に興味があったものの、途中で自分の興味のあるものとは違うことに気づき、建築自体に興味をなくし、どの授業も楽しく聞くことができなくなりました。何となく単位は取っていたものの、3年後期の研究室配属で、どの分野の卒業研究を行うか決めるときに、建築材料・施工について知りました。建築物を建てる際に必要となる使用材料の特性や、職人の施す技術の度合いなどによって、建築材料・施工の性質が変わることにとっても興味を持ち、それらについて学びたいと思ったので、現在の研究室に所属を決めました。

卒業研究の内容は、木目模様をコンクリート表面に転写する、打放し仕上げの型枠工事に
関する実態調査でした。この研究は、型枠工事を専門としている全国の事業者
にアンケートを回答してもらい、実際にどのようにコンクリート表面に転写を行
っているかを明らかにすることを目的として行いました。4年生のときの私は、
研究室配属のときに建築材料・施工に興味を持ったとはいえ、知識はないもの
に等しく、専門として作業を行っている方々に向けてアンケートを作成するこ
とは、とても大変なことでした。相手が質問の意図を理解しやすく答えやす



日々の研究・実験を行っている中の一場面。

いものになるように、勉強をして何度も内容をつくっては修正を行う繰り返しでした。返ってきた回答は、現場を通さないとわからないような事実が書かれていたり、どれも自分の知らないことばかりで、研究対象としている分野以外もちゃんと知らなければいけないなと思い知らされました。そして、関連する分野についても学び、調査結果を学外に向けてまとめ、**日本建築学会関東支部研究発表会で発表**しました。優秀研究報告集に選定されたときは、これまで努力することのなかった自分と比べて成長を感じ、わずかでも努力が評価されたと思いました。また、今後の研究を行うための参考になり、自信を持つことにもつながりました。

大学院生になって半年以上が経ちましたが、大学院に進学したといっても肩書が変わるだけであり、自分の能力は変わりません。その上、修士研究では、今後の社会にどう活かされるかなども考えることが求められるため、研究をしながら勉強をすることの繰り返しです。研究

計画を立てるためには、専門知識を必須とすることが多くあります。今まで勉強を十分にしていなかった自分は、とても苦勞をしています。先生の指導と学外の発表でいただいた意見を参考にしながら、日々研究を進めています。

大半の人が、幅広い分野に触れる学部生活の中で、自分の目標を見つけて、その目標に向かって行動すると思いますが、目標を見つけれなかったり、私のように目標を失ってしまう人もいます。もし後者だったとしても、自分の興味のなかったものが、実は蓋を開けてみるととても面白いものだったりするので、諦めずにがんばってほしいと思います。■

研究室の春合宿スポーツ大会の写真。



今年度の実験の様子。



計画系の研究の発信とは？

自分の可能性を信じて一步踏み出す

TEXT = 加藤千晶 助手

2008年 茨城県立取手松陽高等学校 卒業

2012年 日本大学理工学部建築学科 卒業

2014年 日本大学大学院理工学部研究科博士前期課程 修了

2015年～日本大学理工学部建築学科

受賞歴

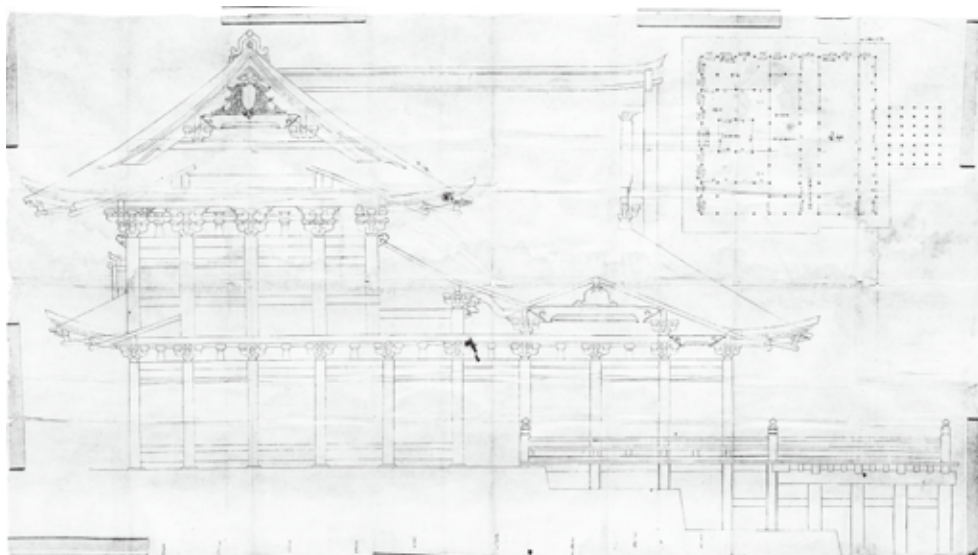
2012年日本建築学会優秀卒業論文賞



日本建築学会優秀卒業論文賞のメダル。

若 気の至りだったのですが、日本建築学会優秀卒業論文賞に応募した理由は、楳建賞審査に落ちたときのくやしさにした（大泣きしたのは内緒）。でも、やっぱり、自分の研究の意義に対して自信を持っていたので、優秀卒業論文賞にチャレンジしたいと思い、応募しました。歴史研の友人たちも、自信のある卒業研究を仕上げていて、お互いに論文をブラッシュアップして、優秀卒業論文賞に応募したのを覚えています。

私の卒業研究は、江戸時代に徳川家光の命により再建された奈良県の長谷寺本堂（国宝）のために、設計段階で作成された3案の設計図面のデザインを読み解くものでした。長谷寺本堂の造営を担ったのは、幕府の関西における工事を指揮していた、中井家の御大工とその配下の大工たちです。幕府の関西の大工の意匠に対する意識について、一石を投じるような研究だったと思います。受賞の報せを聞いたときは、その専門の第一人者である先生方に、自分の論文を読んでもらえたんだ、ということが実感できて嬉しかったです。



長谷寺本堂建地割図（設計図）のうちの1枚（室町時代風の案）。細部意匠などの分析を通じて、室町時代風、桃山時代風、江戸時代風の3つの意匠案がスタディされたこと、そして3案の中から最もふさわしい案が選ばれたことを明らかにしました。

審査（当時）は、一次審査を通過すると、2名の査読員によって論文本文が精査され、受賞者が絞り込まれます。今振り返ると、優秀卒業論文賞の応募は、学外の先生方に論文を査読していただける光栄な機会でした。

卒業研究を通して、現在残っている歴史的建造物や史料が、今に伝えてくれることを表現する楽しさを感じていた上、受賞が後押しして、現在のように研究を続けていくことになりました。現在の研究は、江戸時代の複合社殿（一般的に権現造と呼ばれる）に関するもので、卒業論文のときは違う角度から、幕府大工の意匠論・設計論に光を当てています。

研究で成果が出てこないと感じるときには、卒業論文に打ち込んでいたときのことを振り返ることがあります。当時は、研究に対しても、日本建築史に対しても初心者で、思い込みを持たずに研究に取り組めたからこそ、すいすいと上手くいったところも大きかったと思います。いろいろな情報に浴していると、気づかないうちに、いろいろな思い込みや当たり前が自



長谷寺本堂遠景。

分の中に形成されていきますが、そんなときほど、頭の中の知識などを真つ新な状態に戻して、建物や一次資料に向き合っていくのが大切なんだと感じています（もちろん、吸収したたくさんの情報は、その後に役立ってきます）。

また、たとえ自信がないときに発表した梗概でも、学外の研究者の方が、それを引用してくださったという嬉しい出来事もありましたし、研究に粗があったからこそ、たくさんの研究者の方から、研究をより良くするためのフィードバックが得られることもありました。自信の有無に関わらず、ちょっとでも一步踏み出して発信してみたこと、そのこと自体が良かったと思えます。

■



2012年の日本建築学会大会で行われた受賞式にて。

伝える努力

TEXT = 長尾芽生（アールエイジ）

2008年 新潟県立長岡高等学校 卒業
 2012年 日本大学理工学部建築学科 卒業
 2014年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻 修了
 2014年～株式会社アールエイジ

受賞歴
 2014年トウキョウ建築コレクション
 全国修士論文

修 士論文を書いてから、6年が経とうとしています。ちょうど学生生活と同じだけ社会人生活を送りました。どちらの6年も、がむしゃらで充実したものでしたが、やはり学生時代に考えたことや出会った人が、今の自分をつくっているなど感じます。

私は、「地域における文化活動拠点の評価に関する研究 墨東エリアにおけるアートプロジェクトを対象として」というテーマで研究に取り組みました。対象とした地域には、「墨東まち見世」というアートプロジェクト（以下AP）開催以後、年平均4、5件の拠点が設立され続けると同時に、多くのアーティストが会期後もそのエリアに住み、活動を継続していました。



上：お茶屋さんだった場所を使った私設図書館。墨東まち見世によって生まれた文化活動拠点のひとつ。下：堂地堂の店内。

現在も日本中で多くのAPが行われています。APをきっかけに、新しい拠点ができたり、街に賑わいが生まれることは、ストック活用や観光産業の面から見ると好ましいかもしれませんが、一方で、これらの活動が、地域社会から受け入れられやすい土壌をつくるためには、APの評価制度が必要なのでは？と考えたのが、この研究のきっかけです。

修士論文に取り組むにあたって気をつけていたことは、「伝える」ということです。研究は誰かに見てもらい、新しい視座や、批評をもらうことで、はじめて完成するものだと思います。いつか誰かが見てくれればいいな、という思いでは、誰にも伝えることはできません。さまざまな特色の拠点が增えることで街が豊かになることや、地域でさまざまな働き方をしている人がいることを、学内に限らずいろいろな人に伝えたいと思い、**トウキョウ建築コレクション（以下、トウコレ）**に修士論文を応募しました。

トウコレでは、1次審査を通過すると、公開での発表と審査員との討論会が行われます。当時APに関する論文は、現状分析や特定の立場からの視点をまとめたものが多かったのに対し、地域住民に評価してもらおう試みや、そもそもAPの成功とは何なのか？という研究の視点を、審査員の方々には面白がってもらえたように感じます。一方、言葉選びや表現方法に関しては、とても悔しい思いをしました。どんな



墨東まち見世は、地域の魅力発信、ネットワーク育て、まちの課題をアートで共有することを目的としたアートプロジェクト。

相手に対しても、等しく同じ熱量で伝えることは難しく、時に相手のフィールドに寄り添いながら説明をする必要があります。よく聞き上手とか話し上手とかって言いますが、つまりは、「思いやり」を持てるかどうかなのかなと思います。

社会人になって、自分の好きなことをひたすら考え続ける時間は、極端に少なくなっていました。仕事をしてお金を得るという責任は、やりがいがあるとともに、「個」としての自分を見えづらくします。家族ができれば、より一層その傾向が強くなるかもしれません。だからこそ、当時とことん考えて良かったなと思います。もうすぐ母になりますが、これを機に、新しい地域への関わり方をスタートさせようと思っています。先輩方にも、「論文は書いて終わりではなく、社会に出てからがはじまりだ」と言われました。いわゆる実践編ですね。学生の皆さんに負けないう、日々、伝える努力を続けていきたいと思っています。 **駿**

左：一昨年から、江ノ島電鉄沿いの港町、鎌倉市腰越というエリアで地域を盛り上げる活動に参加しています。右：飲食店や洋服製作をしているママさんに声をかけて腰越で行われたマルシェ。今後は私もできることを探していきたい。



REPORT 1 | 海外研修旅行 2019

ヨーロッパ7カ国：スペイン～フランス～イタリア～オーストリア～チェコ～ドイツ～オランダ～フランス
現代のアートと建築と街を巡る旅

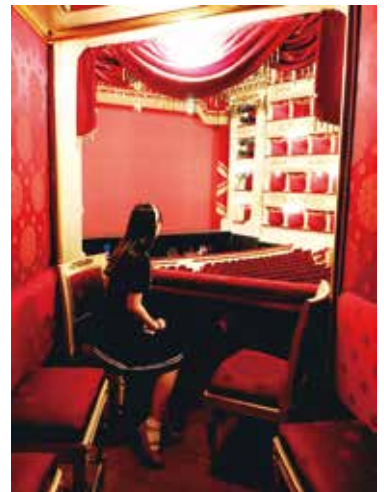
現代アートの魅力を発見できた旅

TEXT=宮崎桃歌（2年）

私は絵が好きで、美術館によく遊びに行きます。今回の海外研修旅行のコースは、佐藤慎也先生の引率による美術館を巡るコースだったので、私にとって楽しみは多かったです。研修旅行中は、現代アートの美術館を中心に観て回りました。現代アートというと、なんだか意味のわからない作品ばかりで、それまで古典的な西洋絵画を中心に観てきた私には、苦手意識がありました。しかし、毎日美術館に足を運ぶうちに、現代美術の良いところ、面白いところ、見方などにコツが掴めてきます。これは、研修旅行で得た大切な財産のひとつです。1番好きな現代美術館は、ドイツの**アプタイベルク美術館**でした。展示作品も、建築も、とても良かった。

自由研修日には、古典美術館を主に巡りました。バルセロナの**カタルーニャ美術館**、ウィーン**の美術史美術館**、パリ**のオルセー美術館**が、巡った中のお気に入りでした。自由時間に、佐藤先生とたまたま立ち寄ったミラノの美術館で、思いがけずミレーの『**オフィーリア**』と出会えた瞬間は最高でした。図録は枕元に置いて寝ています。

本当に、毎日夢みたいに楽しかったです。昼間は素敵な建築を観て回って、いろんな人の写真に写り込んで遊び、美味しいものを食べて、夜はホテルで友達と部屋に集まってお喋りをする24日間でした。その土地でしか手に入らない本もたくさん買えました。実際に建築も観た、建築家の**オットー・ワグナー**の図集が一番のお気に入りです。時間もたくさんあるので、今まで話したことがなかった同級生や先輩と仲良くなれて、友達も増える良い機会となりました。 関



ミラノ・スカラ座の客席からの写真。紅のベルベットと金の装飾が愛おしい。



パリのオルセー美術館。美しいアーチの織りなす空間に加え、所蔵作品が好み過ぎて天国みたいな場所だった。

参加者リスト

●参加者：[2年] 大島草平、加藤史晏、金田南斗、小坂直也、小松田真由、篠崎実紗、新村浩望、野倉里紗、平野翔太郎、宮崎桃歌、迎美弥、森花海、湯川智咲、[3年] 磯野大輝、市原未悠、上村聖、河内祐介、岸本杏実、水津融、杉村和紀、高田文哉、高田怜奈、土屋真美子、西田美奈、福本桜子、山口由稀、岡添安莉、箕聡史、山口真穂、[4年] 成澤茉由、山崎桃花、[M2] 大岩郁穂 ●同行教員：佐藤慎也 教授、井口雅登 助教

国ごとの文化の違いを感じる旅

TEXT=金田南斗（2年）

今 ままで間違いなく、一番多く建築を見た24日間だった。はじめて来たヨーロッパに最初は慣れることができず、言葉や街並み、食事などにいちいち戸惑っていた。しかし、次第に慣れていき、帰国したときには日本の言葉、街並み、食事に戸惑ってしまうほど、ヨーロッパの文化を体感することができた。このヨーロッパでの体験は、自分に大きな影響を与えてくれた。

旅行中、ヨーロッパでつけていた日記と写真を見ると、今でもその建築の空間を鮮明に思い出することができる。ヨーロッパには、ここでは紹介しきれないほどたくさんの面白い建築があったが、中でも自分の中で印象的だった2つの建築を紹介したい。

ひとつ目は、有名なミース・ファン・デル・ローエ設計のバルセロナ・パビリオンである。「Less is more」や「God is in the detail」の言葉通りの設計で、とても美しい建築だった。シンプルな建築ではあるが、空間にはどこか豊かな雰囲気を感じられたのが面白かった。

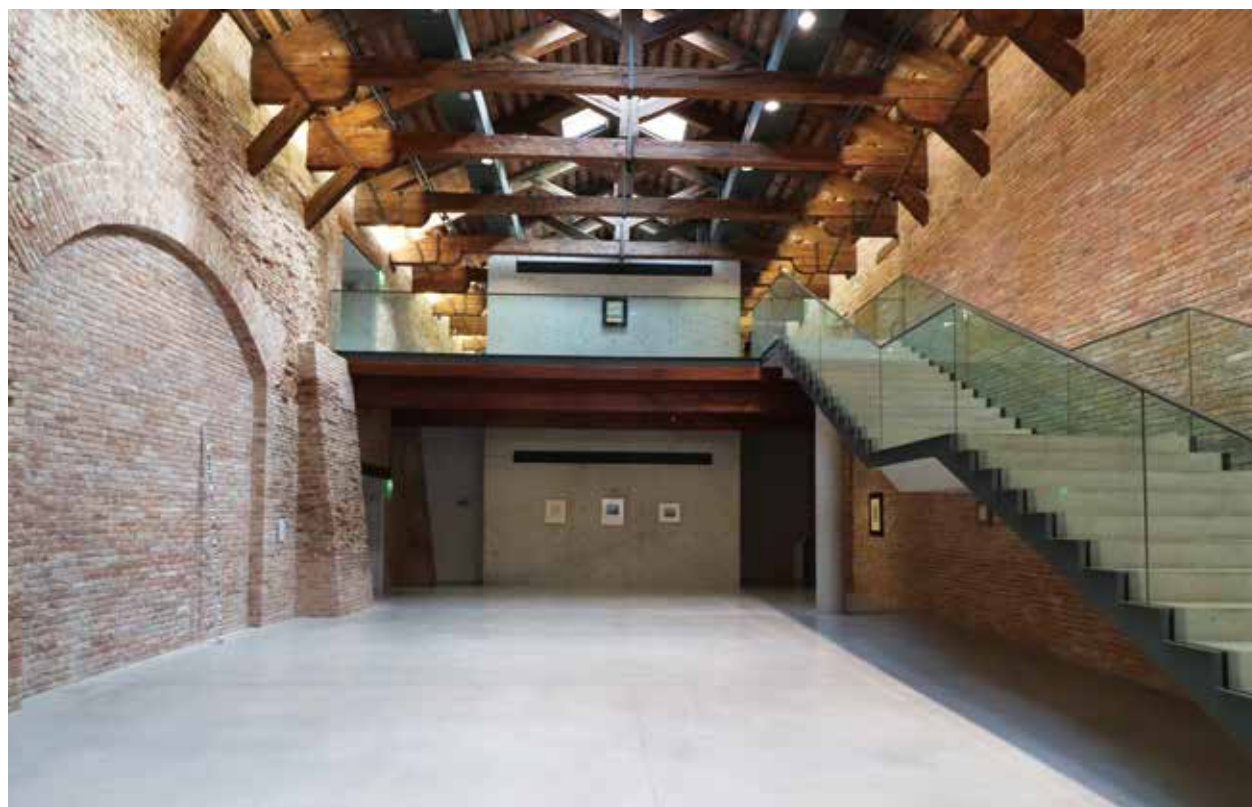
ふたつ目は、ベネチアにある安藤忠雄設計のプンタ・デラ・ドガーナである。レンガでできた税関をリノベーションした美術館である。レンガと天井の木材と安藤忠雄のコンクリートという3つの素材が調和し、力強さと美しさを兼ね備えた建築であった。

ヨーロッパは、建築以外にも、ランドスケープ、歴史、ファッション、アートなど、日本にはない文化がたくさんあった。また、国によっても文化は微妙に違う。この海外研修では、短期間にたくさんの国を回るのだから、それらの国の文化の違いを感じることができる。この貴重な体験を糧にし、これからの学生生活も頑張っていきたい。

■



スペインにある、ミース・ファン・デル・ローエ設計のバルセロナ・パビリオン。



ベネチアにある、安藤忠雄設計のプンタ・デラ・ドガーナ。

REPORT 1 | 海外研修旅行 2019

海外を訪れるからこそ見えてくるもの

TEXT=岡添安莉（3年 | 佐藤慎也研究室）

「旅」というのは、空港に着いた時に終わるのではなく、周囲の景色が、わざわざ目を凝らすこともない日常に戻った時に終わる」小説家、角田光代の言葉である。満員電車に乗り、人混みを掻き分けて大学に通う、忙しい東京での生活に戻った今、思い返せば、夏の研修で過ごしたヨーロッパは、実に穏やかで、時間がゆっくり流れていたように感じる。研修自体は、息つく暇もないほどハードスケジュールであったが、ヨーロッパの街並みや人々の暮らし方がそう感じさせたのであろう。

時間の流れという点で、最も印象的であったのが、チェコの首都**プラハ**だ。中央ヨーロッパ最古の都市で、全市が世界遺産に登録されている貴重な街である。一国の中心都市でありながら、中世から現代まで、街全体で、時代ごとの様式をうまく組み合わせながら歴史を保持している。日本でも、歴史ある都市として京都が挙げられるが、要所要所で断片的に保存されている京都に比べて、プラハは、まるで時代の流れをそのまま都市に落とし込んだように、総括的に保存しているように感じられた。

こういったように、海外を訪れると、日本を客観的な目で見ることができる。当たり前で日常では見落としてしまう自国の良さや弱みを、改めて確認できることこそ、海外旅行の醍醐味だと私は思う。広い視野が求められる建築という分野において、今回の研修で見えてきたものは、私にとって大きな糧となっただろう。



プラハ城から見たプラハの街並み。

築150年以上の建築物に囲まれて

TEXT=水津融（3年 | 空間構造デザイン研究室）

私 が、今回の海外研修で最も印象に残っているのは、**サクラダ・ファミリア贖罪教会**である。まだ海外研修3日目の見学ということもあって、非常に衝撃を受けた。ファサードはテレビや写真でよく見ていたが、内部に入り、その美しさに圧倒されたのを覚えている。息をのむ美しさとは、このことかと思った。

パリの**ノートルダム大聖堂**の尖頭が焼失したとき、再建案をコンペで決めるというニュースが世間を驚かせたが、別段に新しい思想ではないのかもしれない。ヨーロッパでは、用途変更が盛んに行われ、ひとつの建築に新たな価値観や要素が追加されていった。駅舎を現代美術館に改修したのを見学したが、躯体をそのままに、表皮のみ変更している例が多く、その中に奇抜な現代美術（見ていると自分の常識が音を立てて崩れ去るような錯覚に襲われた）が表皮の一部と化しながら展示されていた。有名な**モンサンミッシェル**も、増改築の末に現在の姿となっている。ロマネスク様式教会として建造された後、要塞、牢獄とその用途を変えていった。聖堂の半分が破壊され、その後、修復されたが、当時の主流はゴシックであったため、ゴシック様式で修復された。それらのことによって、同一空間にロマネスクとゴシックが混在している、非常にカオスなものとなっていた。

そのような文化の結果、街中では、築150年、200年といった建築がゴロゴロしている。日本ではありえない光景だろう。ぜひ体験してもらいたい。

左：サクラダ・ファミリア内観。ガウディの「森」のイメージを忠実に表している。右：モンサンミッシェル身廊。手前の半円アーチがロマネスク、奥の内陣の尖頭アーチがゴシック様式。



REPORT 2 | スーパージュリー 2019 合同講評会

ゲストは乾久美子氏、稲垣淳哉氏、和田隆介氏の3氏
学年を横断した外部ゲストによる講評会

本 来であれば10月12日に予定していたスーパージュリー（合同講評会）は、過去にも例を見ない大型の台風に見舞われて延期となり、約1ヶ月半後の11月30日に開催されました。

スーパージュリーとは、各学年の垣根を超え、前期の設計課題の優秀作品を集め、外部から招いた複数のゲスト講師により講評されるイベントです。今年は、乾久美子氏、稲垣淳哉氏、和田隆介氏をゲストとして招き、建築家や編集者という幅広い視点から、学生の作品を見ていただくことで、普段の授業とは違った学びの場を用意する試みとなりました。各学年合わせて16作品のプレゼンテーションに加え、ゲストのレクチャーも行われ、土曜日にも関わらず、他大学の学生や非常勤講師の方々も参加し、例年以上に盛り上がりました。

ゲストの乾久美子さんは、今回の講評会の中で、「学年も課題も違う作品を同時に講評するイベントは他大学にはなく、大変めずらしいものであり、難しい」と話され、そこでの評価は、「課題や学年を超えたデザインの『普遍性』、つまり『強度』のあるものを評価すべきだ」と話されました。その中で、最優秀に選ばれたのは、2年生の先崎亜美さんの「共村」という作品でした。お茶の水の錦華公園を敷地とした幼稚園の課題は、都市型の公園の中で、どのように公共性とセキュリティのバランスを取るかが難しいものでした。しかし、その中で先崎さんの案は、幼稚園に必要な諸機能をキャラクターのある小屋に分割し、敷地に散りばめる配置とすることで「村」のような集合体を形成し、建築と公園の境界線に緩やかな境界、つまりセキュリティラインをつくるというものでした。この提案は、「幼稚園と公園」という枠組みを超え、2つの相容れないものを「共存」させる手法として確かなデザインの強度を持っており、そこが多くのゲストに評価されました。

学年も課題も超えた、さまざまなものが「共存」しながら新しい建築を目指す場であるこのスーパージュリーが、今後も続くことを期

受賞

最優秀賞：先崎亜美（2年） 稲垣淳哉賞：吉沼彩華（2年）

優秀賞：平山茉歩（3年） 和田隆介賞：橋本愛佳（4年）

乾久美子賞：森野和泉（3年） 佐藤光彦賞：林深音（2年）

参加者

- 2年「住宅」：佐藤将人「現代式住宅」、湯川智咲「移ろうイエ-谷中に根付く100年計画-」、鈴木佳奈「Sequenc」、林深音「谷中を呼吸する家」
- 2年「園児のための遊び場・学び舎」：伊藤菜々子「自由性と探究心」、吉沼彩華「A Collection of Ellipses」、先崎亜美「共村」、高瀬舞衣「Turning」
- 3年「代官山コンプレックス」：相川文成「物の表出」、石田千裕「面でつくる立体街路」、古秋琳「代官山風景の延長」、平山茉歩「「まち-無数のコミュニティと一つの建築-」、森野和泉「代官山KAMIHITOE」
- 4年「千代田区におけるリ・ディベロップメント」：谷寿歩「Green Park AKIBA」、橋本愛佳「秋葉原体験の表出」、八木悠花里「共棲」、瀧川未純「時の反照-『日本らしさ』を今、東京に-」

理工建築学科

TEXT= 田中麻未也 職員（設計講師室）



最優秀賞の先崎さんのプレゼンを聞くゲスト一同。さまざまな色彩と大きさの小屋が混ざり合う模型表現が高く評価された。



優秀賞の平山さんのプレゼン。素材まで書き込まれた詳細な図面と手描きパースの完成度が非常に高かった。



作品の講評を行う乾久美子さん。鋭い指摘とユーモアで会場を沸かせた。



稲垣淳哉さんのレクチャー。濃密な数々の作品の解説に圧倒される。



和田隆介さんは、編集者の立場から、建築や出版に携わる自身の活動を解説。普段は聞けない他分野の興味深い話が展開される。

第35回釜山国際建築大展2019において建築学専攻の田口周也君、小田島立宜君が入賞

「第34回釜山国際建築大展2018 (国際アイデアコンペティション)」(主催：韓国建築家協会釜山建築家会、日本建築家協会近畿支部、天津市建築学会)において、建築学専攻2年の田口周也君(今村研)の作品「Accumulating barracks」が「大賞」、建築学専攻1年の小田島立宜君(今村研)の作品「Hyper School」が「奨励賞」を受賞した。テーマは「Transformation Form, Use, Landscape」。小田島君は二次審査を通過し入選、田口君は三次審査に進出し、現地でのプレゼンテーションを経て、大賞1点に選ばれた。



大賞を受賞した作品「Accumulating barracks」。



奨励賞を受賞した作品「Hyper School」。

第11回ハーフェレ学生デザインコンペティション2019において建築学専攻の田口周弥君、小川朋大君、小田島立宜君のグループが優秀賞を受賞

「第11回ハーフェレ学生デザインコンペティション2019」(主催：ハーフェレジャパン)において、建築学専攻2年の田口周弥君(今村研)、建築学専攻1年の小川朋大君(田所研)、小田島立宜君(今村研)の作品「命のものさし」が「優秀賞」を受賞した。最終選考会(公開プレゼンテーション)を経て、最優秀賞1点(該当者なし)に次ぐ優秀賞1点に選ばれた。



優秀賞を受賞した作品「命のものさし」。

第15回「新・木造の家」設計コンペにおいて建築学専攻1年の小田島立宜君、宇佐見拓朗君、小川朋大君のグループがトステム賞を受賞

「第15回『新・木造の家』設計コンペ」(主催：森林をつくろう)において、建築学専攻1年の小田島立宜君(今村研)、宇佐見拓朗君(古澤研)、小川朋大君(田所研)の作品「大黒柱のレシピ」が「トステム賞」を受賞した。テーマは「世代を繋ぐ家」で、二次審査(プレゼンテーション)を経て、優秀賞3点、特別賞2点に次ぐ後援団体賞2点に選ばれた。



トステム賞を受賞した作品「大黒柱のレシピ」。

MESSAGE FROM OB/OG VOL.9

「やってみたい」を求めて探し出した 「保存修理技術者」という職業

私は、文化財建造物の保存修理の設計監理を行っている文化財建造物保存技術協会（文建協）に所属し、文化財建造物修理主任技術者のひとりとして、国宝である旧富岡製糸場西置繭所の保存修理事業に携わっています。

文化財建造物といえば、歴史ある社寺や茅葺民家などが想像できるかと思います。実は、こうした文化財建造物も、建てられてから一切手を加えられずに現在まで伝わるものはありません。常に扉が締め切られている神社本殿のような建物であっても、屋根や塗装などは経年劣化を免れませんので、ある程度の期間ごとに修理をしますし、長い年月で建物に歪みが生じたり、白蟻の被害にあったり、150年に1回程度は、構造部材の分解と再組立を伴うような大規模な修理が必要となることが多いです。こうした修理の機会に、意図せずとも文化財としての価値を損なうことの無いように、適切な修理方針を検討し、工事の設計を統括する技術者のことを、特に「保存修理技術者」と呼んでいます。

建物を観察し、つくり手の意図を読み取る能力

大規模な修理工事中は、部材や構造を詳細に調査することができるので、それまで知られていなかった、建築史的な発見や学際的な知見が得られる数少ない機会となります。そのため、工事中は、修理現場に常駐して設計監理を行うと同時に、さまざまな調査を基に、その文化財の新たな価値を見出す役割も担っています。調査では、さまざまな痕跡を手掛かりに、既に変更してしまった昔の姿や使い方など、現在までの建物の変遷を解明します。建築家が、施主の要求と自らの理想を基に建物をつくり出すのは逆に、「保存修理技術者」には、建物をつぶさに観察し、そこ



修理のため架けられていた覆い屋が撤去された、竣工間近の西置繭所。

佐藤明生（さとう・あきお）

学部卒業：2008年

所属研究室：建築史・建築論研究室（大川三雄研究室）

卒論テーマ：明治末から大正期における歴史意識と保存理念

修論テーマ：近世八脚門の木取りと建築技法に関する研究（2010年、東京藝術大学大学院）

勤務先：公益財団法人文化財建造物保存技術協会



2019年10月現在の西置繭所は、工事も終盤となり、内部の整備が佳境となっている。

からつくり手の意図や使い方などの情報を読み取る能力が求められます。こうした使命こそ、文化財建造物修理に最前線で関わることの醍醐味と言えます。

多彩な職能で成り立つ建築に、自分の「やりたい」を求めて

大学に入学し、3年生頃までは意匠設計にぼんやりと憧れを感じていましたが、ある日、建築史の講義中に「建築史図集」を眺めていて、「これは面白いかもしれない」と思いました。4年生では、建築史・建築論研究室の大川三雄先生のゼミに所属し、建築の多面的な面白さ、楽しみ方をご教示いただきました。それから就職を考える時期となり、元々つくったり分解したりするのが好きだったこともあり、建築史の範疇で実際に建築をつくる仕事に就くことができると思っていました。そんなとき、重枝豊先生に文建協のことを教わり、文化財建造物の保護修理について具体的に興味が湧いていきました。

文化財建造物は、社寺民家だけではなく、洋館や工場施設に至るまで、さまざまな時代の種類の建物があります。基本的な取り組み方自体は変わりませんが、担当建物が変わる度に先入観を捨て、その現場で大事なことは何か、意識的に考え方を切り替えるのが大変です。また、建物種別ごとに異なる建築技法や仕様をその都度勉強しなければならないのは、まさに超えられない高い壁といえます。就職した頃は、社寺の修復に興味がありましたが、近代建築の修理を担当してからは、時代の近さゆえの面白さや発見の多さを再確認しました。今後も文化財建造物修理の技術を深めていきたいと感じています。

■

ARCHITECTURE & ME

[連載]私と建築 vol.98

ミーソン遺跡で学んだこと

text=重枝豊 教授

卒業研究のときに、下町の住宅調査（台東区）で、基礎的な調査手法（実測・聞き込みなど）を学び、その後も世田谷区、大田区、板橋区などの住宅調査、民家・社寺の調査に加わった。だが、それらの手法は、図面採取の形式的意味を知っただけだったことを後に知る。

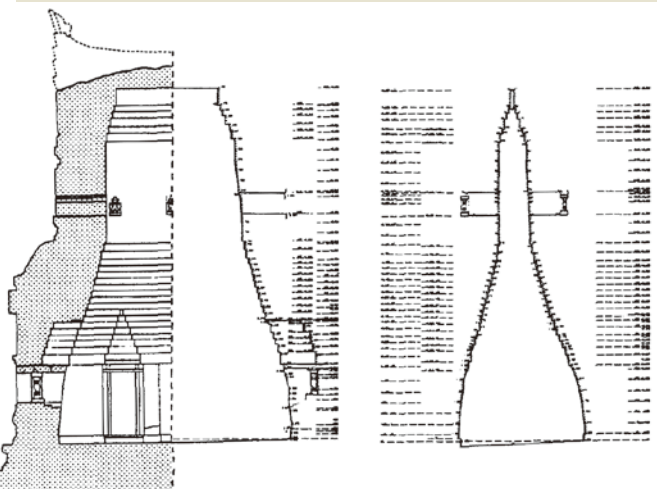
1990年からベトナムのミーソン遺跡群の調査をはじめた。遺跡内に近所の民家から借りたベッドや机を持ち込んでいたので、時間はふんだんにあった。調査に飽きてても、車は3週間後に迎えに来るように約束していたので、移動はできなかった。この時代には、携帯電話は山奥のミーソンでは使えず、歩いて簡易郵便局に行って、電話で遺跡まで来てくれるタクシーを呼ぶこともできなかった。



食事の際の記念写真。遺跡警備隊の村人たちと。

毎日、日中は図面を採り、夜には電気も無かったので、懐中電灯で図面の清書を続けた。1週間も経つと、「なんのために実測しているのか」、「詳細はどこまで必要なのか」について悩みはじめた。ベトナム人協力者は、歴史・美術の専門家だったが、建築については相談できなかった。ひとりでレンガ建造物に向かってブツブツと呟きながら、この実測から導き出せることについて考えた。各建物の時代差や構造形式の違いを、どのように証明するかについて想いを巡らせた。

清書した図面の一部。



東西断面図

南北断面図

しげえだ・ゆたか：1954年、山口県下関市生まれ。野田学園高等学校卒業。1977年、日本大学理工学部建築学科入学卒業。1980年、同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。1980年、同海洋建築工学科副手。1983年、同大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程単位取得退学。1989年～、日本大学理工学部建築学科。

右写真：今では、世界遺産内での生活は当然許可されない。毎食、遺跡警備隊の村人が食事をつくってくれた。



左：ひとりで実測の大変さから手伝ってくれた学生。右上：内部に竹で足場を組んでの実測。右下：この方法は、内部のレンガを観察する良い機会となった。

現地調査では、写真は三脚と水準器を据え、まずはポラロイド写真を撮り、確認後に絞りを3段階変えて撮影した。また、各遺跡は相当に損傷（不同沈下も含む）していたから、水糸を張って、水平を決めて実測する必要があった。日差しは強く日陰は無いから、朝6時から11時頃までは実測、15時までは午前中の実測の確認、それから写真撮影という毎日だった。1週間で手持ちのアルコール類は無くなったから、まさに健康的な調査生活が続いた。

ある日の朝、あつけないほど簡単に結論が出た。「最初に答えを丹念に設定・検討してから実測すること」だった。3週間が経ち、ダナン市内での快適な生活を望んでいたが、ホテルに戻って3日目には、残りの予定をキャンセルして、ミーソン遺跡で過ごすために現場へ復帰した。その時期の研究は初歩レベルだったが、小さな成果でもそれをやり遂げる。その結果として、次のステップが見えることがわかった。何よりも、「建築から学ぶこと」をはじめて体得できたことが成果だった。

その後、デジタルカメラが普及して、その場で画像が確認できるようになって、ポラロイドを撮る手間が省けた。しかし、その日のうちに写真番号を図面に書き込む作業が増えた。研修や調査後、その日のうちにホルダーに分類することを原則としていたが、帰国後も写真の整理には手を焼いた。写真をトリミングしたり、白黒写真にしてみたり、パワーポイントに貼り込んでメモを書き込んだり、時間を消費した。撮影時に気づいたことの7割は、3ヶ月ほどで記憶が薄らぐから、この作業をしないのなら撮影をやめるべきだと決めた。撮影した写真を見直している総時間数は、誰よりも多いと思うが、現場で自ら気づいたことを誇らしく思っているからやめられない。その後も、フエ王陵の解体修理、北部・中部の仏教建築、中部の民家と、次第に範囲が広がった。今は、ベトナムの遺跡が、自分なりの修復・調査・研究手法を学ぶ場を与えてくれたことに感謝している。

▲

Contents

02

[SPECIAL FEATURE]

学外へ世界へ 研究力の発信

[スペシャル座談会]

・研究の魅力とは？ 学外発表の醍醐味とは？

[環境系]

・国際会議への投稿、他大や企業との共同研究も | 岡庭拓也 (M2・建築音響研究室)

・4機関合同の騒音・振動に関する研究プロジェクト | 後藤佑太 (M2・建築音響研究室)

[構造系]

・自分の人生を決定づけた学外発表での経験 | 田嶋和樹 准教授

・私の研究人生の原点 - 国際解析コンペ FRAMA を振り返って - | 河野圭一郎 (D1・RC構造・構造解析研究室)

・大学院生活の経験を社会で活かして | 熊田健太 (西松建設)

・見失った“目標”が、研究活動で見つかった | 稲澤琴恵 (M1・材料施工研究室)

[計画系]

・自分の可能性を信じて一歩踏み出す | 加藤千晶 助手

・伝える努力 | 長尾芽生 (アールエイジ)

16

[REPORT]

・REPORT 1 | 海外研修旅行 2019

・REPORT 2 | スーパージュリー 2019 合同講習会

19

[NEWS & TOPICS]

・第35回釜山国際建築大展 2019 において建築学専攻の田口周也君、小田島立宜君が入賞
ほか

21

[Message from OB/OG]

vol.09 「やってみよう」を求めて探し出した「保存修理技術者」という職業
佐藤明生 (文化財建造物保存技術協会 / 2008年卒業)

23

[Architecture & Me]

vol.98 ミーソン遺跡で学んだこと | 重枝豊 教授

24

[Visit & Criticism]

学生建築探訪 vol.12 <家劇場> 見学記

稲村浩成、久保開隆、佐藤玲菜、田沼元、西田美奈、平山茉歩、森野和泉 (3年 | 古澤研究室)

SHUNKEN

2020 Jan. Vol.47 No.4

「駿建」

発行日：2012年1月15日

発行人：佐藤慎也

編集委員：橋本修・山中新太郎・田嶋和樹・

古澤大輔・道明裕毅・堀切梨奈子・山崎誠子

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.12

〈家劇場〉見学記

稲村浩成、久保開陸、佐藤玲菜、田沼元、西田美奈、平山茉歩、森野和泉
(3年 | 古澤研究室)

今回の学生建築探訪は〈家劇場〉の見学記です。〈家劇場〉は、足立区千住にある築80年の空き家をリノベーションしたもので、住人が暮らしながらパフォーマンスやイベントを行い、地域に家を開いていくというユニークなプロジェクト。実は、ここの住人であるとともに設計を行ったのは本学OGの緒方彩乃さん(佐藤慎也研究室修了)で、同じくOGの小笠舞穂さん(同研究室修了)も、このプロジェクトのメンバーになっています。〈家劇場〉は、新しいコミュニティスペースが創出されている事例を称える「LOCAL REPUBLIC AWARD 2019」において、審査員特別賞(山本理顕賞)を受賞するなど、注目を集めつつあります。気になった学生は、ぜひチェックしてみてください!

田沼: 行ってみた感想だけど、〈家劇場〉は、建物単体というより、千住のまち全体と連携しているような、拡がりのある活動としての印象が強かったな。

平山: そうだね。まち全体で〈家劇場〉だ、と私も感じました。隣家の子どもの声や、まちの音が聞こえるなど、外の環境をうまく取り入れていて、通常だと排除されてしまうような要素を、逆に活用しているのが面白かった。

久保: 感想を一言でいうと、アットホームな感じ。

稲村: たまたま通りかかったおばあちゃんも気軽に話しかけてくれるような感じが新鮮だったよね。

西田: 空き家を改修したものだけど、私は空き家そのものに悪いイメージを持っていました。だけど、ここではまちを活性化させるキッカケになった。周りの住民の方々が、ここから何かが起こりそうな雰囲気、期待を持っている感じが伝わってきました。

平山: 建築としてはとても小さいものだけど、なぜか建築としての「表面積」が多いという印象だった。

田沼: 表面積って良い表現だね。日が暮れてから外観を見たら、光が漏れていて、それもまたとても良い感



家劇場の全体像。手前の小屋が奥の劇場(母屋)のホワイエとして人々を出迎える。

じだった。

佐藤: ダンスや舞踏などのパフォーマンスの場に使われていて、用途は既に家だけではないけど、もともと家だったからこそ担保されている質のようなものを感じました。親しみやすさが重要なかもしれない。

平山: 空き家になる前に住んでいた方のいろいろな痕跡が残っているのもポイントですね。

佐藤: お化け屋敷のイベントをやるなど、活用の仕方がとても面白い! 既存建物の暗さ、汚さ、佈さなど、ネガティブ要素をポジティブに転化していると思った。

西田: 既存建物というハード面のマイナスポイントを、ソフト面でプラスに転化しているんだね。

久保: 道路に面した離れの部分がオープンに設えられているから、他の建物に比べて、アクセシビリティが高いのだと思う。

森野: 建築的な構成を見ると、前面道路から奥の部屋まで何層ものレイヤー構成になっているのがわかるよね。奥行き感を出すには、やっぱりこうした構成的な側面が重要なんだと再認識しました。

田沼: とところで、あの建築の価値っていうのはいったい何なんだろう。

森野: 山本理顕さんが唱導する地域社会圏的な文脈でいうと、建物がプライバシーを高めて閉じってしまうと、地域に対する価値の提供はそもそも期待できない。だけど、あの〈家劇場〉は開かれているので、地域と建築との間に価値の享受が成り立っている。

西田: その価値というのが、金銭的な価値基準ではないことが重要だね。オーソドックスに言えば、人と人とのつながりとか。でも、なんか時代が遡っている印象。こういうのって流行なのかな? あの〈家劇場〉的なものを、例えば自分たちの設計課題で提案したらどう評価されるんだろう。

田沼: ソフトに頼りきっていて、建築的じゃないじゃんって先生はたくさんいそう(笑)。

西田: 内部の機能と建築の形態が全然対応していないくて、どう捉えたらいいのかわからないのかも。

稲村: あの開かれた雰囲気をつくるために、あえてハードをいじらなかつたのかも知れない。いじらないというと消極的な印象だけど、むしろこの選択を積極的にしたのだと思う。

西田: 価値自体がリノベーションされているってこと?

森野: 既存の状態を、そのまま提示していたようなプロジェクトだったと思う。まるで、マルセル・デュシャンの「泉」のように、レディメイドなものが、提示の仕方によって新しい価値を纏うような感じを受けました。

平山: 家としてギリギリ成立している不思議な感じを理解するには、私たちが持っている既存の価値基準を更新しないといけないのかもしれない。いずれにせよ、用途が特定できない場が生まれていたように思う。こうした場の可能性について、引き続き考えていきたいね。

竣



見学の様子。元は駄菓子屋だった空間を改装している。



小屋の内観。劇場の縁側が奥に見える。



劇場で緒方さんと対談。劇場はほぼ既存のまま残存する。

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>